

現実からの乖離 — 高島和宏の展示

小倉正史（美術評論家）

高島和宏（kaz：1967）はロンドン在住のアーティストですが、近年、日本でもたびたび映像を主体とする作品を発表しています。今年の2月から3月にかけて、東京・表参道で作

品を展示しましたが、そのために選んだ場所は、一般に公開されているスペースではなく、招待を受けた人だけが予約した日に訪れることのできる、プライベートな展示空間でした。



プロジェクターと5枚のガラスを使った高島和宏のインスタレーション

このような空間のありかたは、訪れた人が、作家の応対と相まって、展示された作品と親しい関係を持てるという特色を持ちます。しかし、高島が惹かれたのは、むしろ、その空間の物理的なありかたでした。

その空間は、四方の壁も天井も床も白く、それほど広くはないホワイ・キューブです。彼がその空間を生かして展示したのは、きわめてシンプルな映像のイン

スタレーションでした。仕組みを簡単に説明すると、向かい合わせになった2つの白い壁のほぼ中央にプロジェクターがあり、プロジェクターの前に角度を多少変化した5枚のガラス板が置かれています。それらのガラス板を通して、ビデオの映像を正面の壁に投影するのですが、5枚のガラス板が映像をそれぞれ異なる方向に反射するので、プロジェクターの背後の壁に反転して重なり合った映像が映し出されます。

もともなうたビデオの映像は2通りあります。ひとつは渋谷駅前のスクランブル交差点を通過する人たちを写した「CROSSING（クロッシング）」で、もうひとつは同じ交差点の夜景を写した「CROSSROAD（クロスロード）」です。ここで掲載している画像は、いずれもそれらが重なりあった映像の一場面です。一般に、デジタル化された画像処理技術の洗練は、美術の分



渋谷駅前スクランブル交差点の夜景を写した「CROSSROAD」

ともあれ、一般論として言うなら、美術では、現実にあるものをもとにして、それを写すとか表すとかすること、映像とか映像という現実とは

別の次元のものを作り出します。いわゆる作品化です。現代美術では、個人としての美術家の意識とか態度をよりどころにして、もともとなる現実の選び方、それを作品化する的方法、その作品を展示する目的などが導かれることとなります。



渋谷駅前スクランブル交差点を通過する人たちを写した「CROSSING」

体も、2面の壁面に投影された映像とともに、インスタレーションとして展示されていたのでした。そして、その展示を可能にしたのが、ホワイ・キューブの空間でした。

そこに映し出されたものは、スクランブル交差点の風景が反転・重合して、現実ではあり得ない幻想的な映像ですが、それから先は、見る人が受ける印象の強弱とか解釈の問題になるでしょう。人によって違った視点から都市の夜景を見たり、あるいはそれに関心を持つことなど急ぎ足で通り過ぎるといった、現代の都市で毎夜のように繰り返されていることが、投げかけられているということでしょうか。

そこで注目されるのは、美術家が置かれた状況です。美術家の個人的な生活環境はもちろんのこと、制作活動を方向づける社会的・文化的・政治的などの状況を知らなければなりません。ある状況下では、現実について知らせようとする、あるいは現実について自分の考えなり信条なりを伝えることが重要かもしれません。別の状況下では、そのようなことに関心を持つよりも、自分の今置かれた状況に適合する方向を目指すことが重要かもしれません。

た作品には、その美術家がどう現実を受けとめているかが現れているわけであり、それが、その美術家の作品を解釈する手がかりになるのです。



本連載の30回目ですが、Kindle版「現代美術を考える」として電子書籍化されています。お買い求めは上のQRコードから。

小倉正史現代美術講座開講
4月25日（土）15時
若山美術館（銀座）①